被災をくぐり抜け使命を果たす

本川橋（ほんかわばし）

本川（ほんかわ）は、太田川放水路が完成するまで大田川水系の本流で、旧大田川の通称でした。毛利輝元が広島城を築いた城下町には旧西国街道が通っていましたが、橋の架設は最小限にとどめていました。このため、街道筋の商家であった猫屋九郎右衛門が私財を投じて木橋を架けたのが本川橋で、明治の頃まで猫屋橋と呼ばれていました。1591 年頃には架けられていたとされており、この周辺の地名・猫屋の由来になったとも言われており、明治時代になって、現在の本川橋に改名したとされています。

木橋であった猫屋橋は度重なる洪水で被害を受けたため、明治 30 年（1897）当時の最新技術の「鋼板トラス橋」に架け替えられ、広島の中心市街地中島町への橋として利用されていました。しかし、昭和 20 年 8 月 6 日、広島は原子爆弾で多大な被害を受け、爆心地から 250m の位置にあった本川橋も、橋桁が移動して橋脚からはずれるなど、部分的に落橋したため板を載せて使用されていました。しかし、追い打ちをかけるかのように 1 か月後に襲撃した枕崎台風、続く 10 月の阿久根台風で完全に落橋してしまいました。

本川橋は広島の復興に欠かせない重要な橋で、架け替えは急務でした。しかし、戦後の混乱期で資材不足というなか、終戦前日の大空襲で壊滅した旧光海軍工廠から廃材を調達し、再利用されたのです。橋長 73.2 m、幅員 6.7 mの鉄製トラス橋が、昭和 24 年に完成しました。

現在でも本川橋を見ると、不要なボルト穴は見られますが、弾痕らしい孔は見当たりません。当時の担当者たちが復旧工事の際に、弾痕を塞ぎ、曲がった材をハンマーで叩いて作業を進めたとのことです（「本川橋も廃材で再建」中国新聞 2006.2.11 参照）。そうした若い技術者たちが架けた橋は大切に補修を重ねながら、今なお現役として利用されています。

なお、本川橋も九十九橋同様、爆撃被害建材の再活用橋梁として令和 3 年選奨土木遺産に選定されました。この橋の北側には東側河岸用と橋桁との繋ぎ目部分の路面用の石があります。これも被爆遺構であるため、2003 年の橋補修時に取り外され、モニュメントとして設置されています。

■位置図

本川橋親柱

利用されていないボルト穴が見られる本川橋

本川橋
橋長 73.2 m、幅員 6.6 m　鋼板トラス桁

広島本川橋（大正頃）
【広島市公文書館蔵】